

ぐるっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可
平成二十年八月一日発行（毎月一回一日発行）
第十五巻第四号（通巻第一七二号）

鈴



ぐるっけ

俳句雑誌

GLOCKE

第172号

8. 2008

アンの島

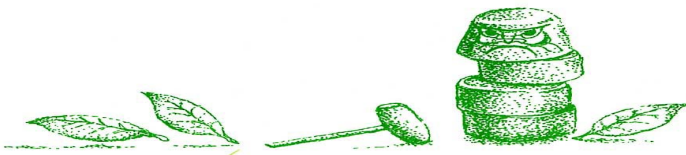
品川 鈴子

リラ冷えの島に再び白髪のア

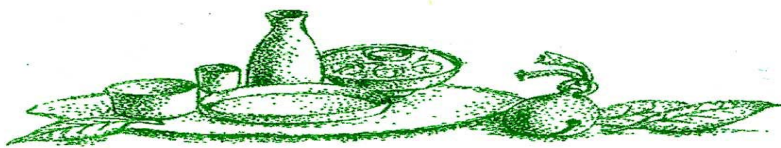
白髪のアン佇む茅花流しの島

再会のH^ハU^グGに白夜の時わすれ

ハンモック喜寿の體をやつと載す



牛も信徒か苜蓿にひざまづき
雨こぼれ牧の筒鳥首かしぐ
芝刈車日がな乗りづめロッジ主
脛ながきロッジの主半ズボン
カーサ・ロマ
黴の階踏み外させる城の霊
帰るべき国あり梅雨の空港に



玉

鈴

吟

埼玉 岡田 章子

草引きし指にサファイヤ同期会
野蒜引く茎の太きを選びては
強莢トビに嘴のあと実糸イトんどう
香水が匂ひ追ひ越すハイヒール
樟若葉絵馬に外国語の多し

愛媛 岡野 峯代

若葉風護摩火よじらせたま霊の来し
新緑にしみる法螺貝大読経
ほどほどに老いても愛称喜寿五月
袋掛フクロカケけ樹上で競う若夫婦
早すぎる毛虫の孵化に手順替え

大阪 岡本 幸枝

バス停に俄か仕立ての筍小屋
神社への禰宜の抜け道たんぼらば
花筏魚藍観音帰らばや
色襲イロノサ式部好みの花蘇枋
西行とあらば素描す紅枝垂

大阪 奥田 妙子

千年の源氏の墓は桜どき
神鹿の像は小さめ花の杜
清水涌く朱塗りの柵に夕日さす
花明りタカラジエンヌの耀ふ目
筍の薮長岡の御座敷か

東京 片野 光子

しやきしやきと齒ざはりしかと露を煮る
真砂女忌の雨の銀座をぶらぶらと
ゆるゆると桜吹雪の路を行く
閉門は日暮までとや竹の秋
咲き乱るポピーの径に友を待つ

兵庫 勝野 薫

うつろひし庭に変わらぬ利休梅
糸振子毛虫くまり風あふる
留守がちの庭に著我咲き野猫寝る
火袋の格子目抜けるてんとむし
美作の峪間に繋ぐ鯉織

兵庫 金田美恵子

一つ覚え二つ忘るる炎暑かな
束の間のしじまを破る蝉時雨
汗手貫抜きて僧侶の一日終ふ
碁敵を待つ公園の緑蔭に
廃屋の奥の風鈴よく響く

兵庫 唐鎌光太郎

窓開けて祭囃子に耳すます
町神輿レストランより覗く客
楠公さん参りて毛虫貰ひくる
立ち止まりひと息つけば若葉風
山並の新樹揺すりし風受くる

兵庫 川合まさお

大桂 蘂芽吹く八十本
新緑や石の碁盤の浅き目地
卯波までひゞき仕舞の足拍子
新緑を四角に見せる陣屋門
石橋は元禄八年牡丹咲く

大阪 河村 泰子

ふくよかな檜葉ひばのかをりも花の寺
西行の鏡石あり花映ゆる
九センチの胎内仏に花明り
小塩山より風神おどる飛花落花
花の門小野道風書きし額

東京 岸 はじめ

踊り子号車窓に新樹飛ばしけり
吹き流し火の山にいま風を聞く
熔岩のごろり大室山に初夏
空き別荘梅の実一つだけ残す
小綬鶏の啼き激しくて日の暮るる

東京 北川とも子

母少し笑顔もどりて桜の実
引く潮の足裏ひきぎする夏初
潮騒のわづかに届き余花の昼
葉桜のかすかに揺るる闇にをり
噴水の夜に溢れてとめどなし

東京 北畠 明子

ひらひらと電車近づく花の昼
どこからか発声練習花の風
中庭に育つパンジー大病院
失ひしものの重みや牡丹散る
春雨やだみ声で鳴く明烏

兵庫 木原 今女

縁談は今日で終りぬ花卯木
樟若葉蔭のベンチの忘れ物
五十年 麓に暮らし針槐
葎長けおのころ島の寺社廻り
歳時記を飛び越えて来る夜の蜘蛛

薬草歳時記

(一七二) ハナオクラ(黄蜀葵)・オクラ

菅原由紀

草にねて山羊紙喰めり黄蜀葵

飯田 蛇笏

ところでオクラの花をご存知ですか。はて花の美しさをどう表現したのか：殿方にお尋ねしました。初恋の君・清らかな花色に大柄な姿のせいか妖艶な気配・わからん・花言葉に恋により身が細るとは宜なるや。

アフリカ原産のオクラ(英名)は灼熱の乾季と雨季を繰返す地で次々と実を結ぶ遅しい植物で体に優しい貴重な食物でした。幕末頃日本に伝わり豊富な食物繊維で整腸作用やコレステロールを下げ、ビタミン、Ca、Feを含み栄養価も高く、食欲のない人にネバネバと喉越しの良い野菜です。暗紫赤色の芯(雄しべと雌しべ)で淡黄緑色の五弁花は早朝に咲き昼に萎むや実がなり、たちまち大きく固くなるので柔らかい未熟な実を食べる。保存の干しオクラは水に戻し使用。

オクラより花が大きく葉も深裂する花オクラ・黄蜀葵(中国名)は中国原産で根の粘液をトロ口にたとえ和名をトロ

ロアオイ。粘液を和紙の糊料に用い花びらを三杯酢等で頂く。薬用部分の根は黄蜀葵根(生薬名)で鎮咳・利尿・緩下・催乳作用や丸剤錠剤の賦形薬。花や葉はでき物、やけどに、種子は浮腫に用いる。染色に葉や茎を用いアルミ錫媒染で黄色、Feでオリブ、Cuで黄茶色に染まる。

初めてオクラを育てた時お早ようと声をかけ、茎丈1mに大きな葉を広げる可憐な小さな花にドキドキし、葉を食らうトビ虫と戦い来年用の実を1個残してもいでは食べやがて秋を迎えた。10月に入り種用の大きなさく果は弾け、中にはびつしりと小さな黒い種子が顔をのぞかせるその傍らで、最後の花がどうにか開き小さな実を結んだ。何故かがつくりきて「終わった」と告げる私にコーヒー片手に新聞を読み乍ら「時間がきたんだよ」と事も無げに言う夫の言が妙に腑におちた。

今年は五月連休に種をまいた。三代目の我家のオクラ、友人からの花オクラ、そして新聞募集で得た綿の種ですべてアオイ科です。花くらべが楽しみます。

参考文献 「植物の事典」東京堂出版

「日本薬草全書」新日本法規

「原色牧野和漢薬草大図鑑」北隆館

著者略歴神戸薬科大学卒

鈴の奏

品川鈴子選

家のこと忘れ祇園の若葉雨 兵庫 田中 佳子

南座へ扇翳して来る男の子

店先に夏野菜置く先斗町

たらの芽や升にこぼるるコップ酒

巢作りの赤土運ぶつばくらめ 兵庫 坊野貴代美

藤房に飛びつくかまえ猫しやがむ

若葉風マニキュアの手に花鋏

風薫る喜寿の師に逢ふ句の縁

亀の背に桜葉ふる宮の池 埼玉 松木 清川

はね馬の雪形浮ぶ妙高に

花大根レンタルルームにダンスの影

白鷺は稚魚を啣へて跳び立ちぬ 香川 田中真由美

人生の終へ方などと絹糸草

夏の朝母より先に子が起きる

緑雨降り夫は背を向け本を読む

陰口も惚気に聞ゆ心太

新芽囁む虫の多発に打つ手なし 愛媛 濱田ヒチエ

血圧に効くと妹蓬干す

麦の秋回復きざしないままに

伊予晩柑三日がかりのママレード

もち麦の熟れて棚田に雨兆す 兵庫 国永 靖子

筍へ投銭ひびく無人市

杣谷の晴れゆく気配青胡桃

手揉みして香立ち初む茶の葉かな 兵庫 栗栖八重子

昆布すだれ浜かげらして海かくす

数万本積んで田植機ざわざわと

衣更え胸は造花の若造り

散り柳魚形となり水に乗る 兵庫 伊勢ただし

しるがねの橋に逆打ち遍路バス

噴水の止みて子らの合戦場

春潮に外国巨船割つて入る

怪獣を買へと駄々こね子供の日 大阪 井上あき子

どんこ舟で巡る水郷ざぼんの実

川下り枝垂柳を肩に受け

秀 鈴 記

巻頭 三句 品川 鈴子 評
四句〜十五句 石橋 萬里 〃

*選句は全て 品川鈴子

南座へ扇翳して来る男の子

田中 佳子

花大根レンタルルームにダンスの影 松木 清川

京の繁華街を若い男が、扇をかざして歩いてくる。ちよつと気になるその姿は陽射しをさけるだけでなく、人目を憚るようでもある。行き先はと見れば、男は四条の鴨川べりの建物「南座」へやってきた。やはり梨園の若手で大切な後継者かなと納得する。舞台の一コマのような美しい出会い。

藤房に飛びつくかまえ猫しゃがむ

坊野貴代美

老いも若きもダンス流行りの近頃は、パーティー会場やレッスン場が郊外へと広がる。
街はずれで花大根が植えられている辺りに、手ごろな賃貸の部屋を確保すると、華やいた男女の灯影が花大根にもこぼれ、たけなわのリズムが流れる。都塵にまみれたダンス場よりも、むしろ田園の風情が好まれ、新鮮に盛り上がる。片田舎へもレンタル全盛の波。

猫は主に愛玩用ながら、エジプト時代から家畜化され鼠害対策に役立ち、神聖視された。在来のと猫は奈良時代に中国から渡来。足裏の肉球や鞘に引込む爪、ざらざらした舌、鋭い感覚の髭など、しなやかな構えは、肉食類として動く物に飛びつく狩の本能。なのに長い藤房が目当てとは、色香に惑うか平和な世。

人生の終へ方などと絹糸草

田中真由美

絹糸草はヨーロッパ原産のイネ科の多年草。湿らせた綿を水盤に敷いて種を蒔くと、絹糸のような新芽が密生して萌え出す。グリーンインテリアとして涼を求める。人生の楽しみ方を工夫されている作者に脱帽。

伊予晩柑三日がかりのママレード

濱田ヒチエ

伊予柑が市場に出回るのは三・四月頃だが、晩柑は時季遅れて家庭で食べられることが多いそうだ。三日がかりで作られたママレードは、一年中食卓を賑わすことでしょう。

手揉みして香立ち初む茶の葉かな

国永 靖子

八十八夜の頃に茶の新芽を摘んで、蒸したのち揉みながら乾燥する。作者はその過程をご自分の手で体験された。茶の香が辺りに立ち籠め、おいしい新茶を堪能されたことでしょう。

昆布すだれ浜かげらして海かくす

栗栖八重子

昆布は褐色の大きな海藻で、二、三メートルにも達する。刈り取った昆布は浜辺で干されて食料になる。

昆布漁の最盛期になると、浜一面が昆布のすだれで覆われる。浜かげらして海かくすの表現が雄大さを物語っている。

春潮に外国巨船割つて入る

伊勢ただし

春になると潮の色がしだいに淡い藍色に変わり明るい感じになってくる。

岸壁に春の潮を割って近づいてくる巨大な白い外国船。港の風景が目につかぶスケールの大きい句である。

砂利に坐すスカート鉤裂き大花火

井上あき子

揚花火や仕掛花火などいずれも夏の風物詩である。

河川敷に坐って花火を楽しんでいる作者。だんだん首が疲れてくる。対岸一面の仕掛花火に見惚れてスカートの鉤裂きに気付かなかつたのでしょうか。花火の余韻に浸りながらの家路。

薫風に外テーブルで昼の膳

四葉 允子

南風が緑の草木を渡つてすがすがしく吹いてくる。爽かな風に誘われて、昼食の献立を考えている。バルコニーに机を出し、白いテーブルクロスを敷いておしゃべりな気分、囁きも聞こえてくる豊かなひととき。